

◆朝日新聞社賞◆

〈学校教育部門〉

「小学校における情報モラルのカリキュラム開発と実践」

滋賀県大津市立瀬田小学校

〒520-2141 滋賀県大津市大江4-2-1

■実践事例報告の概要

瀬田小学校では、3年間をかけて情報モラルのカリキュラムを開発してきた。個人情報の保護、知的財産権の尊重、正しいコミュニケーションのあり方など、情報モラルの指導で焦点となる内容を児童の発達段階に応じて体系的に構成している。具体的には、WEBの閲覧や検索に際して、インターネット上には不適切な情報も含まれていることや、チャットや掲示板、携帯電話の安全で正しい使い方などを体験的な学習モデルで指導している。

実践のねらい

インターネットはすべての人が地球規模で情報の受発信ができる大変便利なメディアであるが、一方で、使い方を間違えると財産や命さえも失いかねない危険なツールでもある。本実践では、瀬田小学校で3年間取り組んできたことを元に、小学校でどのように情報モラルを指導すればよいかを提案したい。

特徴・工夫・努力した点

情報モラルの指導は「心を耕す」学習である。つまり児童の自己判断力と自己規律力をいかに育てるかが大切である。そのために、教師側の価値観を押しつけるのではなく、児童自身が気づき、自分自身を変えていく過程をカリキュラムの中にいかに組み込むかが大切になる。

実践内容

瀬田小学校では3年間を費やして、情報モラルのカリキュラムを開発し、実践してきた。情報モ

ラルで指導すべき内容として、「個人情報の保護」「知的財産権の尊重」「不正アクセスの防止」「インターネット上の不適切情報に対する対応」「掲示板の正しい使い方」「チャットの安全な使い方」「携帯電話のメールやウェブアクセス」などの学習課題を立て、この課題に対して、児童の発達段階に応じた学習課程を企画し、教材となるコンテンツや学習活動の進め方を示す指導案、ワークシート等を整備してきた。

本実践は、小学校における体系的な情報モラルの指導事例として一般化し、汎用性のある学習モデルを提案することで、他校の情報モラルの実践に役立ててもらうことを目標に取り組んできた(資料)。

実践結果

本校では40台のコンピュータ教室だけでなく、各教室にも1台ずつ端末が設置され、児童は日常的にネットワークを利用している。また家庭でも、ブロードバンドに接続されたコンピュータを自由に使っている児童も多い。さらに、高学年の半数程度の児童は自分専用の携帯電話を使っている。

このため、児童のITスキルは高く、ネットワ

情報モラルのページ

2004年12月 大津市立湊田小学校

1、小学校における情報モラル学習のコンテンツ(案)

	情報化社会の特質	情報技術と生活	不適切情報への対応	ケーススタディー				コミュニケーション実習		
				通知の仕組み	個人情報の保護	知的財産権の尊重	セキュリティ	WEB	掲示板・メール	メール
1年	×	×	×	悪口はダメ	×	勝手にコピーしてはいけません	×	受信	印刷	メール
2年	×	×	有害情報	×	アンケートに注意	×	パスワードは大切に	受信	印刷	メール
3年	町で見かける情報機器	知るせてくれるものを探そう	正しくない情報	イタズラや悪口	自分の名前と住所、電話番号	勝手にコピーしてはいけません	作品を大切に	検印	電子掲示板	パソコンメール
4年	情報化による社会の変化	身近にあるメディアの良さと特徴	成人向け情報	相手を傷つける言葉	友だちの個人情報	勝手にコピーしてはいけません	ログと履歴	検印	電子掲示板	パソコンメール
5年	世界を結ぶ通信とネットワーク	情報ネットワークの利便性と危険	危険な情報(下ネタ、自殺)	差別や偏見	アンケートに注意	情報発信の際に守るべきこと	ウイルス	発信	チャット	携帯メール
6年	情報化社会の進歩と未来、個人と社会	情報の読み書き、メディア特性に応じた利用	危険な情報(詐欺、架空請求)	匿名性・覆面性	送られる個人情報	遠慮コピーに注意	不正アクセス	発信	チャット	携帯メール

ーク上の不適切な情報に接触する可能性も高いため、情報モラルの指導は本校にとっては必須の学習活動となっている。併せて、保護者の関心も高く、各学年に応じた保護者への啓発活動も行っている。

本実践は低学年から高学年まで体系的にモラル指導を行う取り組みであり、この学習を行うことによって、児童のモラル意識は明らかに向上したと考えている。カリキュラム構成はスパイラル構造を持っていて、毎年の積み重ねによる繰り返しの学習が次第に深まることになって、卒業する段階では児童の情報セキュリティ意識と相手を意識したコミュニケーション能力が育つものと期待している。また、次世代のネットワーク参加者として、未来のネットワークを主体的に改善していく公共心溢れるネットワークに育ってもらいたいと考えて本実践を実施した。

考察(今後の課題)

情報モラルの指導と情報モラルの授業の違いを意識することは大切である。

情報モラルの指導とは、「掲示板には悪口を書いてはいけません」「WEBページに個人情報を載せてはいけません」というようなリストを示して、どちらかといえば外的な圧力で児童生徒の行動をコントロールすることを指す。ガイドラインや利用規程の遵守などもこれに相当する。

これに対して授業とは、教師が学習者の考える場面を設定して、児童生徒自身が気づくことで、内面から学習者を変えていく過程を指す。授業と

して成立させるためには児童生徒が自ら気づく場をいかに設定するかが大切である。そのためには、擬似的な体験を通して、情報活用の文脈の中で子どもたち自身が気づく学習を展開することが重要になる。「自動車教習所モデル」のように、ある限定された地域の中で実地訓練を行い、トラブルが発生した場合の対処法を実践的に学ぶ仕組みを作らなければならないのである。

指導と授業、共に学校で行うべき大切な要素だと言える。しかし、現状では情報モラルの授業を体系的に実施している学校はまだほんの一握りに過ぎないだろう。それは、必要性は感じつつも、授業が成立する上で必要となる、「教材」、「指導方法」、「実践事例」の3つとも欠けているのが現状である。本実践をきっかけにして、今後、これらの3点をさらに充実させていきたいと考えている。

また、家庭への啓発もこれからより重要になる。家庭では、パソコンを居間などみんなの目につくところに置き、フィルタリングを行う回線サービスやソフトを利用して子どもたちから不適切な情報を遮断する仕組みを作ったり、履歴を定期的にチェックする家庭でのルール作りを進めたりするなど、ハード的な取り組みが必要である。それに加えて、家庭の中でテレビのニュースについてケーススタディーのように話し合ったり、困ったことがあれば何でも相談し話し合える雰囲気作りを進めたりする「ハート」作りも必要だ。

今後、ネット社会の進展に合わせて、ネットワークを巡るトラブルや危険も増大することが予想されるが、大人が子どもたちに積極的に関わり、共同体としての家族の絆を深めることが今こそ求められているのだと考えている。